



前時の内容を振り返った後、三浦先生は「手で読んでいきます」と、黒板に掲示した本文にマーキングしながら読解のポイントやキーワードを解説。生徒も同様に、本文が印刷されたプリントにマークをつけながら読解を進める。「ここはどういうことか説明してみよう」と、生徒の理解度を確認する問いかけを何度も行いながら展開した。

●1年生「国語総合」の評論「ものごとくは」の授業で、3分割した本文を各1時間で学習する3時間目。具体例を的確に読み取るため、全体で本文を精読した後、その内容を応用して身近なものを定義するグループワークを実施。(P.29に授業デザインを掲載)

教材の特性や育てたい力を基に
活動の形を柔軟に検討し、
言葉を通して思考する力を高める

三浦先生のアクティブ・ラーニング

単元のねらいに応じた学びが
深まるよう、活動形態を検討

国語科を担当する三浦章子先生は、単元や教材に応じて、授業の形態を変えている。例えば、「平家物語」は群読、「羅生門」は知識構成型シグソー法を取り入れ、生徒の学びを深めていく。「教材の特性や生徒に身につけさせたい力の育成に最適な活動を検討すると、おのずと形態



宮崎県立高鍋高校

三浦章子 みうら・あきこ

教職歴23年。同校に赴任して7年目。指導教諭。探究科学コース主任。国語科担当。アクティブ・ラーニングの実践は4年目になる。

宮崎県立高鍋高校

◎秋月藩校「明倫堂」の精神を引き継いで開校。「心身學道」「師弟同行」などを教育理念に掲げる。普通科には、課題研究に力を注ぐ探究科学コースを設置。全国大会常連のラグビー部など部活動も盛ん。

◎設立 1923(大正12)年

◎形態 全日制/普通科・生活文化科/共学

◎生徒数 1学年約260人

◎2017年度入試合格実績(現役のみ)

国公立大は、千葉大、お茶の水女子大、広島大、九州大、熊本大、大分大、宮崎大、宮崎公立大などに55人が合格。私立大は、青山学院大、東京理科大、関西大、西南学院大などに延べ123人が合格。

◎URL

<http://takanabe-hs.ed.jp>



ホワイトボードに各グループで話し合った定義を記入し、代表者がそれを読み上げる。それを聞いて、どんなものを定義しているのかをクラス全体で考え、定義として妥当かを議論した。



うまく表せなかったり、ことば不足に気づいたりと苦労しましたが、みんなで話し合うことで1つの定義にまとめられました。



自分のマークのつけ方が読解を深めるものになっているか、生徒は隣同士でマークのつけ方をチェックする。その後、ことばによってものを定義することの意味を説明した本文の内容を実感するために、3～4人のグループになり、「辞書」「カーテン」「制服」「消しゴム」「時計」など、身近なものを1つ選び、定義を考えるグループワークを行った。

が変わってきます。共通している点は、生徒が思考の過程を共有し、考えを広げ、深めていく学びであることです」

評論「ものことば」では、「ことばがあるからこそものを認識できる」という筆者の主張を理解するため、グループごとに身近なものを1つ選んで定義する活動を行った。この活動は、生徒の課題に基づいている。

「1年生を指導する中で、『例えば……』と考えられない生徒が多いことに気づきました。恐らく、そのものの本質を理解できていないため、別の事象が思い浮かばないのでしょう。今回は、筆者の主張を身近なものにあてはめて考えさせ、本質を捉える力を育みたいと考えました」

思考の活性化・深化への配慮

精読による内容理解が思考を広げる支えになる

本文の内容を基に学びを深めるためには、本文の十分な理解が欠かせず、精読の必要があるが、入学時には文章と向き合えない生徒が多いと、三浦先生は言う。

「『国語は勉強しなくてもできる』と捉えている生徒もいて、難しい言葉が出てくると、考えるのをやめたり、勝手に解釈したりします。そこで、『手で読む』をポイントに、本文に独自ルールのマークを記入しながら、文章から意味を絞り出す意識で読み進めていきます」

例えば、三浦先生は、接続詞や主語と述語の関係、条件節、読者に投げかけられた問いなどにマークをし、生徒は本文が印刷されたプリントに書き込みをする。その際、「縦と横をつなぐ」を意識させて、一文ごとに丁寧（縦）と同時に、文章間の関係を捉える読み（横）を並行して進めていく。

さらに、読解のポイントとなる文章について、「ものを定義するための条件は2つありましたが、それは何でしょう」などと問いかけ、考えを深めていくよう促す。

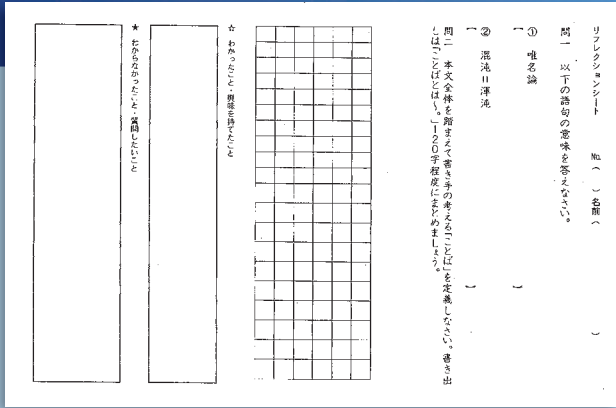
1年生の初めは三浦先生の説明についていくだけで精一杯だった生徒たちは、次第に「手で読む」術を習得し、模試や大学入試でも、問題文にマークをしながら読み進めていくという。

思考力を高めるために、思考の過程を何度も振り返らせる

そうした精読による正確な理解が、その後のアクティブ・ラーニングの土台となる。この日の活動でも、開始直後から話し合いは活発に進み、ほとんどのグループは10分程度で定義を書き終えた。その間、三浦先生は机間巡視しながら、「考えたことをノートに書き留めて」「消しゴムは使わないで」といった指示を出した。

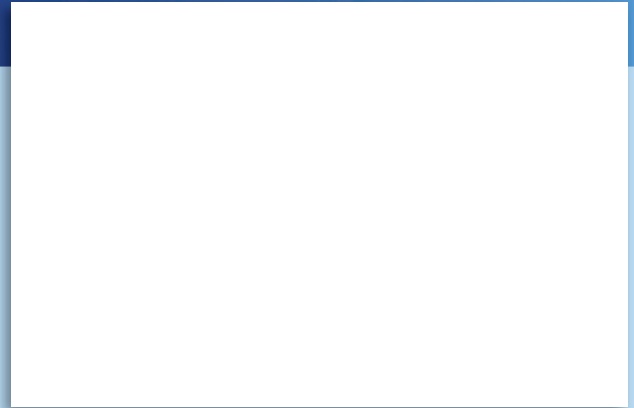
「思考力を高めるためには、思考の過程を何度も振り返る試行錯誤が欠かせません。振り返りができるよう、グループで話したことを書き留め、思考の跡を残しておくようにしています。

12:00 リフレクションシートの記入



本文の内容を振り返り、改めて気づきを促すきっかけとするため、筆者の考える「ことば」を120文字程度で定義するという設問を含むリフレクションシートを配布し、各自に宿題として取り組ませた。「分かったこと」「分からなかったこと」の記入欄もあり、それらの内容は三浦先生がまとめて、後日、全体で共有する。

11:55 グループごとに書き直す



全グループの発表が終わると、三浦先生は本文の内容に立ち戻るように指示。筆者が考えるものを定義する条件として、「外見的・具体的な特徴」「人間側の要素」の2つが必要とされていることを踏まえて、グループで再度定義させた。



グループで改めて話し合い、2つの条件をしっかりと考えて入れると、客観的な定義になると気づきました。



生徒は読解を進めながら考えたことや疑問をメモし、それを思考の過程の振り返り材料とする。三浦先生は黒板に板書をせず、生徒自身に思考をさせることにこだわる。

消しゴムを使わせないのも、思考の過程をリセットさせないためです」
 プリントを貼ったノートの下部には空白を設け、生徒は自分の思考の過程を記録していく。
 本文では、「ものの定義には、外見的・具体的な特徴に加え、人間側の要素という2つの条件が必要だ」と述べられていたが、その条件を満たした定義となっていないグループもあった。例えば、「時計」の定義は、「人が時間を知りたい時に見る、小学生でも分かる生活に必要なもの」と、人間側の要素に偏っていた。三浦先生が筆者の考えに立ち戻って書き直すよう伝えると、「長針と短針があり、人が時間を知りたい時に見るもの」と、より客観性の高い定義となった。
 リフレクションシートでは、筆者が考える「こ

とば」の定義を120文字程度で書く宿題を課した。

「ほかの授業でも、学んだことの本質を100〜120文字程度で整理するような課題を出しています。根拠や前提などを丁寧に追って結論を書く」と、その程度の文字数が必要だ。

リフレクションシートは提出させ、必ず三浦先生がコメントを添えて返却する。その後、書き直しをさせることで、常によりよい文章が書けるよう促す。

場づくりへの配慮

生徒一人ひとりの役割を観察し、ワークを活性化させる

今回の授業ではグループワークとしたが、それは、生徒個別の活動にすると同時間内に定義を完成できる生徒が少ないと踏んだからだ。

「生徒一人ひとりが役割を持ち、考えを深め合ったからこそ、ことばを定義する活動ができたのだと思います」

グループワークを活性化させるために、三浦先生は生徒一人ひとりの役割を観察している。メンバーの役割に固定化が見られた場合、活動が一段落したら、メンバーを入れ替えることも想定していた。

今回の活動では、定義を考えるにあたり、「まず形状をことばにしよう。次に用途を考えよう」などと話し合いを方向づける生徒、それを受け

授業デザインシート

【教科・科目】国語・国語総合（現代文）

【設定時数】3時間中の3時間目

【分野・単元】評論

【本時全体の目標】具体例を的確に読み取り、結論につなげる

【テーマ・作品】「ものごとば」（鈴木孝夫）

学習内容	自校の生徒の特性を踏まえた各学習内容における主な目標（身につさせたい力・姿勢）	左記の力・姿勢の「学力の3要素」への分類	左記の力・姿勢を育むための指導内容	教師による発問・働きかけの内容	教師が特に観察・配慮すべき点
意味段落3を読み解く	<ul style="list-style-type: none"> 本文を的確に読むスキルを習得する。 本文に書き込みをしながら、関連づけて読む。 	<ul style="list-style-type: none"> 技能 思考力 判断力 主体性 	<p>【教師】</p> <ul style="list-style-type: none"> 黒板に提示した本文を、生徒と同時に読む。ある程度スピードを意識しながら読む。一文ごとに丁寧に読む（縦）と同時に、文章間の関係を捉える読み（横）を並行して進めていく。 <p>【生徒】</p> <ul style="list-style-type: none"> キーワードを的確に捉える。 読み取った内容を可視化できるようにマークを書き込む。 	<ul style="list-style-type: none"> 『机』の例はどこまでか、抽象論に戻った箇所はどこか 「こう考えてみると」「そこで」などのつながりの言葉に留意するよう働きかける。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒がただ作業的に読んでいないか注意する。
具体例の分析・深化	<ul style="list-style-type: none"> 形式段落⑳～㉑の「机」の定義について考える。 形式段落㉒㉓から帰納的に具体例を読み解く。 身近な例を1つ挙げ、グループワークを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 思考力 判断力 表現力 協働性 	<p>【教師】</p> <ul style="list-style-type: none"> 4人1組のグループワークを指示する。 「物差し」「辞書」「下敷き」など教室内にある身近なものを定義するよう指示する。 <p>【生徒】</p> <ul style="list-style-type: none"> 実際にものを手に取りながら、多様な見方を出し合う。 出た意見を的確かつ簡潔にまとめ、発表する。 「机」はどのような観点から定義されるのかを理解する。 「人間側の要素」と意味段落2の「ことばは世界認識の手がかり」という内容をつなげる。 	<ul style="list-style-type: none"> 『人間の外側に存在するものの持つ多くの性質』とは『机』の例ではどういった性質か、またそれとは対比的な内容はどのように表現されているか 本文を手がかりに定義づけを行うよう促す。 	<ul style="list-style-type: none"> グループワークに慣れているが、固定的な役割意識が出始めているので、適宜メンバーの入れ替えを検討する。
意味段落4を読み解く	<ul style="list-style-type: none"> 本文を的確に読むスキルを習得する。 本文に書き込みをしながら、関連づけて読む。 「ことばとは～」という書き出しで記述をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 技能 思考力 判断力 表現力 主体性 	<p>【教師】</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒と同時に本文を読み、思考を働かせながら読むよう指示する。 キーワードを的確に捉えるよう促す。 縦に読みながらも横に読むことを意識させる。 「ことばとは～」という書き出しで120字程度で記述をするように指示する。 	<ul style="list-style-type: none"> 「ことばとは～」の後に続く内容をいくつか挙げることから考えるように働きかける。 本文全体を踏まえた記述を促す。 	<ul style="list-style-type: none"> 抽象的な概念的な語句につまずいていないかを確認する。 「ことばとは～」に続く表現が出ているか、一人ひとりを見て回る。

*三浦先生作成の授業デザインシートを編集部が一部改編

成果と課題

指導と評価の改善を重ねて、言葉の力を高めていく

そのような実践を通し、生徒の思考を分かりやすく伝える力や書く力は高まっている。今後の課題は、生徒の思考の深まりを明確に捉える評価方法の確立だ。三浦先生は、定期考査の改善に取り組んでおり、「羅生門」の単元では、所与のキーワードを用いて主人公の心情の変化を図式化させる問題を出した。

「図式化させることで、どれだけの確に理解できているのかが見えてきます。また、これまで『定期考査を通して、生徒の力を深める』という観点が弱かったのですが、そうした問題を解くこと自体が、生徒の学びを深めることにつながると考えています」

今後も、指導と評価の改善を重ねて、生徒の言葉の力を高めていくことが、国語科教員としての自身の役割だと、三浦先生は語る。

「多様な人と一緒に生きていく中で、自分の思いが相手の心に響くように伝える力を育てる教科が国語です。その力は、人生のあらゆる場面で役立つ、武器になると考えています」